

登米懷古館

登米懷古館は、特に江戸時代（1603–1867）に登米を治めた武士に関する歴史的な品々を集めた貴重なコレクションを所蔵しています。このコレクションは、実業家で慈善家である渡辺政人（1892–1975）の永続的な遺産です。

渡辺は登米の農家の家に生まれた五人兄弟の末っ子で、商才に優れ、生涯を通じて多くの影響力のある職に就きました。東北開発（現在の三菱マテリアル）という地域開発会社の社長や、母校である明治大学の理事長を務めました。

渡辺は自らの収集品を登米町（現在の登米市）に寄贈し、この博物館の設立に貢献しました。博物館は1961年に開館し、渡辺は次の教訓を遺しました：

1. 人生で一番大切なことは、誠実である
2. 登米は私達の「家」である
3. 人間は、いつも「初心」を忘れてはならない

現在の博物館の建物は、2019年に開館し、登米の「森舞台」や東京のサントリー美術館などを手掛けた著名な建築家、隈研吾によって設計されました。博物館の建設には、屋根瓦に使用された登米のスレートなど、地元の素材が強調されています。現代的な建物でありながら、登米の過去の要素を彷彿とさせるデザインも施されています。例えば、建物の入り口の直角のデザインは、かつて城下町だった登米の街並みの特徴を模しており、延長された軒先は、伝統

的な農家のデザインを反映して、日差しを遮り、雨をしのげる役割を果たしています。屋根瓦の縁は、木羽葺き屋根に生える苔を模しているのです。

博物館の入口のホールで来館者の目を最初に引きつけるのは、1675 年に遡る秋祭りの祭典、「登米の秋祭り」に使用される華やかな祭りの車（山車）です。次に地元の職人や素材がこの博物館のコンセプトの中心であることを説明する隈氏に関する動画が上映されます。窓からは屋根の延びた軒先が空を遮り、日差しの差し込む庭に注意を引きます。対照的に、主な展示室は土蔵の中のように暗く保たれ、展示されている品々が際立つようになっています。パネル展示では、江戸時代に地域を治めた登米伊達家や白石家の歴史と階層を追って、展示品の背景が紹介されています。

常設展示には、登米の歴史に関連する珍しい貴重な品々が展示されています。特に注目すべきは、白石宗実（1553–1599）の黒漆塗りの五点一式の鉄鎧など、武具や甲冑です。これらは伊達家の家臣であった白石宗実の所持品です。この鎧の兜には「也」という文字が流れのような筆跡で書かれています。また、多くの絵画が展示されており、強大な武将であった伊達政宗（1567–1636）の詩と、尊敬された僧侶である江月宗玩（1574–1643）の書が描かれた絵画や、狩野探幽（1602–1674）の作品が展示されています。企画展示では、地域の歴史のさまざまな側面が探求され、来館者に登米の過去について多くの洞察を提供しています。